

## 百合若傳説の本源

### 坪内逍遙

遠きは今昔、宇治、中頃はお伽、舞の本、下つては浄瑠璃類、八文字屋本、讀本、草冊子等によつて人口に膾炙せる物語のうちにて、其出所の明白に國史にちな因めるもあれば、古き巷説巷説もとづに原けるもあり、或は全くの空想に成れるらしきもあれば、外國種を我國振に引直せるものもあり、總じてやゝいかめしく武張ぶばりたるは人物の名だけなりとも、國史か口碑かに原きて出所の辿り易きならひなるがなかに、一つ二つ不思議の例外と思はるゝがあり、百合若大臣の物語の如きは是れなり。

予が始めて百合若大臣の名を知らしは十二三歳のころ讀みし「大伴かなみち金道忠孝圖繪」(浪華の作者某著)なりきと覺め、其の頃は眞島、金道、輕大臣、佐の宰相などを皆一つらに正史の人物と信じたりしが、長じて國史を學び雜書を讀むこと稍々多きに及びて、百合若の名のみは曾て相似たるをだにも史に見ざるあだを異しむたり、高麗或は蒙古征伐の大將たるほどの名將にして、力は爲朝を凌ぐばかりの強弓を引き四年の間孤島に棄られて俊寛僧都にも似たる艱難を嘗め、中ごろには靈鷹れいようの之に奉仕するあり、末には賊臣を誅するの快舉あり、全くの架空談としては筋の餘りに複雑なるが不審なりと思ひながら、史家に質すこともなくて年を経たりき。

按ふに百合若傳説は最も廣く流布したるものの一なるが如し、されど之れに關して予が知れる限りは太はなはだ狭し、其の最も古きはお伽草紙中に見ゆるものと聞きしが、未だ見ず。予が知れるは舞の本の中なるを最古とす。其の次に來るは古浄瑠璃の諸作なるべし。水谷不倒君の説によれば、井上播磨掾じやうの正本に「百合若鷹」あり、岡本文彌の「百合若高麗攻」ある由。予が讀みたるは寛文二年版の日暮小太夫の正本也。(小太夫は説教節の太夫なる由、これも不倒君の考證なり。)其他は巢林子そうりんしが「百合若大臣野守鏡」爲永太郎兵衛の「百合稚高麗軍配」、前にいへる「大伴金道忠孝圖繪」などのみ。さて寛文二年版の筋立は舞の本の中なるを其の儘に潤色し敷衍したるまでにて、筋も名も殆ど全く同じなれば、今は假に舞の本のを最も古き筋立と見做して批判せんとす。萬一お伽草子のを有せらるゝ人あらば異同を精査せられたし。五月蠅けれど後段の考證に要あれば左に其の粗筋をかゝぐ。

嵯峨帝の御時、左大臣きんみつが大和泊瀬はつせの觀音に祈りて得たる子に百合草若といふあり、十七にて右大臣になれり。さるほどに蒙古より我が朝が襲ふと聞えければ、神託によりて百合草若は總督に任ぜられ、鐵の弓箭を準備して弘仁七年二月に都を立ち「大臣殿の御勢に三十萬騎」、其の外幾萬人を隨へて發向す。さて蒙古どもは四萬艘に打乗つて日本と唐土の潮境へ押出し、妖術を以て霧を降らせ、頻に討手を惱ます。(日暮本の挿畫によれば、蒙古は鬼面、人身也)。百合草

若すなはち神に祈り、其の加護を得て霧を拂ひ、鐵の弓にて射立てければ「四萬艘に打乗つたる蒙古多く討たれて僅一萬艘になり」日本軍全勝となりぬ。

かくて此の凱旋の途次玄界島に上り「大力の癖やらん寝入りて左右なく驚き給はで夜日三日ぞまどろみたまふ。」時に乳母子の別武兄弟逆心を起し、大臣は手疵にて果てられたりと本船の將卒を欺き、眠れる百合草若を棄置きて歸國す。大臣は「船數八萬艘一度に帆を上げ楫を取」りし物音に驚き覺めて船を呼び、波間に躍り入りて追ひ試みしも効なく、獨り島にとゞまり、海草を摘みて命をつぎ憂に日數を送りぬ。さる間別武兄弟に筑紫に歸着し、豊後に在る御臺所に大臣戰死の由を語り、尚都へ上りて左大臣夫婦をも欺き、<sup>あまつさ</sup>剩へ御臺所に艶書を送りければ、御臺所怒りて自殺せんとす。乳母之れを止めて、別武へは御臺所に代りて「君の蒙古へ赴きの時、宇佐の宮に參り、千部の經を書き讀まん」と大願をかけ」既に七百餘部は果したれど尚二百餘部を<sup>あま</sup>剩したれば、今三年間俟ちてよと返書す。かくて御臺所は、いつ死ぬとも圖られねばとて、大臣の紀念の品々をそれぞれ始末するとて、大臣が飼いならしの鷹どもの足緒を解いて放ちける中に緑丸といふ心があり、放たれて後遙かに玄界が島に渡り、大臣に近づきて見知られ、通信者となりて歸り、百合草若の存命を御臺所に知らず。されど再度の使の時身に重き物をつけたるに得堪へて島が根に落ちて死す。大臣見つけ、憫み嘆くことあり。さる間豊後にては、御臺所が宇佐に七日籠りして大臣の無事を祈りしるしにや、いきの浦の釣人漂流して玄界が島に着き鬼の如き容貌したる大臣を救ひて伴ひ歸り、本名を知らざれば<sup>しもべ</sup>僮として使ひをれるを、別武聞き傳へ、其の鬼の如き僮をやがて都へ具し上りて物笑の種にせんとて召寄せ、門脇の翁といふ心にあづけおく。此の翁は年ごろ大臣に任へたりし者なりしが、尚其の人とも心附かず。かくて翌年の正月、筑紫の在廳集りて弓のとうを始め、別武を祝ふことあり。足も顔も苔蒸したるやうなればとて苔丸と呼ばれたる百合草若、矢取の役を命ぜられて弓場に侍し、わざと射術の拙きを笑ふ。別武怒りて、さらば汝<sup>ためし</sup>試に一矢仕れ、否といはば立所に切棄てんといふ。大臣、弓弱うして心に叶はずといひ、持來る限りの弓を悉く引折る。別武大きに驚きながら、昔、大臣が用ひし鐵の弓矢を取寄せて、引けと命ず。大臣容易く之れを彎きて大音揚げ「我れをば誰れと思ふぞ。いにしへ島に棄てられし百合草若大臣が今春草と萌えいづる」云々と名宣りしかば、大友諸卿、松浦黨、一度に畏り服従す。別武も走りおり、降參と手を合するを高手小手に縛め、其舌を抜き、尚首をば七日七夜引首にぞしたりける。云々。

ここに別武兄弟とあるは「<sup>のもりのかがみ</sup>野守鏡」にては別府郷武者雲足、同雲澄といかめしく、末に別府親王と名宣りて、僭上の暴威を振件は大友の眞鳥、平將門さながらなり。又出陣以前に百合若の寝首を搔かんとする件ありて「大力の癖やらん」の一句は病癖といふ意味に取做され「癖の長寝の死人同様」などありて、熟睡癖が一篇を貫ぬく伏線となれるもをかし。又「緑丸」といふ鷹は、此の作にては雌鷹の羽にて矧いだる矢の精なり。大臣が情婦立花といふ心の死體に宿りて玄界が島に渡り還城丸といふ子を生子、後、見あらはされて、飛去るあたりは、「大内鑑」なる葛の葉の前身たると

明かなり。按ふに島より大臣を救ひいだしいきの浦の釣人及び門脇の翁の役は府内の太夫秀主といふ忠臣及び其の子悪文次秀景市郎丸秀虎などに當るべく、尚舞の本などには無き人物にて此の作の立おやまは悪文次が妻の松が枝なるが、これは舞の本なる「入鹿」に見えたる鎌足僞盲目の件を女形に引直したるに外ならず。時代は平城天皇の御宇とありて、處其の他、大筋は舞の本に同じ。

僞永太郎兵衛の「高麗軍記」は原の筋と隔ること甚しく、作としても見るに足らず。只一ついふべきはこれにては緑丸は原話通りの生きたる鷹にて、名を「青陽」と呼び、後に島に渡り来て大臣の爲に敵を防ぎ、別府宗澄が三男三郎雲澄に切殺さると作り做したる事なり。原話にては健氣にも文使ひして途中に疲れ死し、ここにては主の爲に忠戦して死す、共に鷹をして通信の役をなさしめ、兼ねてペソスの料となせり。「忠孝圖繪」は原話を離るること更に甚しく詩趣蕩然たり、緑丸の事是には無し。要するに外國征討と島住居の件と鷹の通信と歸り來りての複讎といふことが百合若傳説の骨子なるが如し。百合若傳説の出所は古人も既に不審がりしものと見えて「松屋筆記」に「百合若草紙に見えたる百合若大臣未だ定かならず、豊後國志に大分君稚臣が事也といへり、大分君稚臣は天武紀に見えたる勇士にて豊後大分郡の人なり」とあり。(天武紀を案ずるに、只其の名見えたるのみにて何の事もなし。)又「鹽尻」には「百合若(或は大臣と稱す)豊後國船居に傳へて故事あり」といひ、次に「或説に百合若は青海公の三男、參議宇合、一には烏養と稱せし此人なりと云、されども確なる古事を見侍らざりしなり」といひ又其の次に「百合若の女を萬壽と云(中略)奸臣別府太郎、同次郎が塚とて別府村にあり(又略)百合若が愛せし鷹を緑丸と云(又略)凡百合若の事九州風土記の説にして昔其人ありと聞ゆ、されど古記實録に所見なきにや、上野國妙義山の脇に百合若の射貫きし岩ありて故事を語るもいぶかし、浦島が故事丹後風土記に見え、武州金川、信濃國寢覺にもいふが如し」とせり。尚ほ「嬉遊笑覽」に「肥後國八代領内に百合若塚といふあり」と記したる前後に牽強の説一くだりありて「百合若は筑紫の人にて玄界が島にて鬼を平ぐるを百合若の舞に作り侍り、然るに奥州の島のうちに百合若島といえありて緑丸といふ鷹のことまで確にある島あり」など見えたれど、これらは疑ふらくは舞の本又は古浄瑠璃等に原きて後人が假作せる地名、人名をさりとも見ぬき得ずして立てたる臆説らしく、斯く引用するさへも徒ら事なるべくや。百合若といふ稚びたる名から、流石に異様に感ぜられけるにやあらん、舞の本には「夏のなかばの若なれば花にもよそへて育てよとて百合若どのと名をつけ」たりと説明し、巢林子は別に本名を立て「豊後の國の旗頭太宰の太郎和田丸」と名宣らせ「百人の力を合する強力」なるが故に、帝勅して百合若と命じたまふと故事つけたり。若と呼びながら大臣の位あるいぶかしとてや、爲永は大臣に經昇るべき年齢資格ながら、繼母轟御前と賊臣宗澄とが奸計の爲、二十三才にして尚ほ前髪を拂はず、云々と解したり。或は宇合の子とし、或は宇合と同人とするなど、いづれも、百合といふ字而に縋りたる牽強なるべし。

さて斯やうの穿鑿三昧、そもそも何の要あるにかと不審がる人もあらんかなれど、これは出所が出所だけに流石に棄てかねし仔細あり、實は近頃所要ありて希臘上代の事蹟を取調ぶる序に、彼の國の古名作及び之れを論じたるものなど二つ三つ讀みゆくうちに、ふと百合若物語とホーマアの

名作オデッセーとが頗る相似たりと思ひ附くと同時にオデッセーの羅甸名のユリシスたることに思ひ及びて、と言はば餘は語らでもあるべきなれど、尚ほ普通の讀者の爲に二者の關係を説明して此の取調の局を結ぶべし。複雑なるオデッセー物語を約め説かんこといと困難なれば、ここには百合若傳説に關係ある節々のみを擧ぐべし。

オデッシウス又の名ユリシスは太古希臘なるイサカ國の君主にして眷力絶倫、兼ねて奇策により、人稱へて多智王と稱す。希臘列國の聯合して小亞細亞なるトロイ王國を征するや一方の將となりて出陣し、十年の攻圍の間智勇兼備の譽れ高し。敵城陥るに及びて諸將と共に凱旋す、途中誤って妖婦カリプソーの爲に魅せられて、其の部下と共に孤島に抑留せられ、年を重ねて歸る能はず。ユリシスが守護神にミネルヴといふ女神あり、ユリシスの爲に天神ゼウスに哀訴し、カリプソーを諭してユリシスを放たしむ、然るにユリシスが諸島漂泊の業因<sup>ごういん</sup>尚ほ滅せずして、或は一眼の巨蠻の爲に、或は種々の女妖の爲に、或は水夫等の過失の爲に、九死一生の厄に遭ふこと更に數回の後、<sup>ついで</sup>竟にファイアシャといふ海國に漂着し、其の國王に優遇せられて歸國の便船を得、前後二十年を経て故郷イサカに上陸す。ミネルヴ再びユリシスに姿を現じて告げて日はく、今や汝が王宮には幾多の專横なる賓客ありて賊臣と結托し、汝が妃ペネローブが後配たらんことを望み日々燕飲して亡狀を極む、速に假装してかしこに赴き、汝の子テレマカスに力を戮せて撥亂反正の功を遂ぐべしと。やがて神通力を以てユリシスを一老翁に化せしむ。ユリシスは教へのままに乞食姿となりて國內に入り、先づ舊老臣 Eumeus ユーミヤスを訪れて暫く其の家に寄寓す。さる程に之れより先、ミネルヴ神の告によりて父の行方を尋ねんとて家出せし王子テレマカス、此の時外國より歸り來り、圖らずもユーミヤスの家にて父に遭ひ、主従親子の名宣りあひあり、それより相携へて王宮に入る。ユリシスは尚ほ乞食姿のままなり。さて人は未だ其の人としも知られどユリシスが愛犬アルガスの、今は老いて歩み得ぬほどに衰えへたるが、さとも認めて嬉しげに尾を揺がしが、やがて喜び死に死にぬ。かくてユリシスはアポロ神の祭典の日に、尚ほ乞食姿のままにて、亡狀なる賓客等の盛宴に侍し、侮辱せらるをも忍びて、報罰の時の機を俟つ。時に妃ペネローブは強請を拒むべき辭に窮して、若し夫ユリシスが手馴しの強弓を彎きて十二箇の環を射通すことを得る者あらば其の人の配たらんと約す。賓客等おのおの弓を引き試む、一人の之れたを能するものなし。ユリシス乞うて弓を彎き、剩へ十二環を射通し、ここにはじめて本名を明し、返す一箭に元凶 Antiuous を斃す。萬堂擾然たり。テレマカス及び舊臣甲乙ユリシスを助けて、奮闘し賓客及び賊臣等を塵にす。ペネローブ夫に再會することを得て歡び極りて泣く、云々。

ユリシス王は百合若大臣、イサカは豊後、漂流中の妖魔は妖術を使ふ蒙古人、故國と漂流先との間に通信者となれる女神ミネルヴは綠丸といふ鷹たることは、ミネルヴが忽然として双翼を開いて上天する様を叙したる本文、又は海鷲となりて飛去る條などを思ひあはすれば明かなり。又ユリシスが老乞食となりて王宮に入るは苔丸の條に符合し、鐵の弓の件と十二環の件とは、正しく話の血統を同じうす。舞の本の門脇の翁、浄瑠璃の府内某はユーミヤスに該當し、王子テレマカスの

役廻りは市郎丸秀虎, 悪文次秀景, 又愛鷹緑丸が非情の飛禽にありながら忠勤を盡して死する  
いぢらしさは, 愛犬アルガスが主を見知りて喜び死に死すといふ條と因みあり。要するに百合若物  
語はオデッシーの粗筋を翻案したるものたると些も疑ふべきにあらぬものから, いづこの國人より,  
いつごろ我が國には傳へたりけん, 我が文藝復興のフロレンス, テーブルスともいふべ山口, 堺な  
どを経て生ひたちしならんかと思はるれど未だ考へず。若しお伽草紙のを最古のものとするれば, 今  
より四百年以上の昔なるべきか, それが些くとも, 二千八九百年前に成りたる希臘太古の名篇而  
も東西古今に亘つて比類なき名作のオデッシーの翻案とは思ひがけなき關係にはあらずや。これ  
によって考ふれば我が足利以降の文學と西洋文學との交渉は, 從來の考證以外について更に尋  
ぬべき點尠なからざるが如し。

オデッシーとの關係は以上述べたるに盡きたれども, 尚其れとは別に, 巢林子が「野守鏡」に見え  
たる悪文次が妻の松ヶ枝が偽盲人となりて別武兄弟に近づき, 苦計の爲に猛火に陥るを辭せざ  
る段と希臘古傳説との間に多少の聯絡あるもおそろし。件の巢林子の脚色は, 舞の本の中なる  
「入鹿」の末段, 鎌足が偽盲人となりて入鹿に近づき, 其愛兒の火中に陥りたるを故と救はずして  
入鹿に心をゆるさずする條に胚胎せること勿論なるが, 件の偽盲人の件は, 正しくユリシスに關する  
古傳説に原ける者の如し。傳説によれば, 始めアガメノン王がトロイ討伐の師を興すや, 希臘列國  
の諸王此の役に與らざるはなし。然るにイサカ王ユリシスのみは, 其最愛の妃ペテローブに別る  
を厭むの餘り, 佯りて狂を粧ひ, 野牛と馬とを同じ犁車の軛に繋ぎ, 海濱にいでて砂路を犁き, 穀  
と稱して鹽を蒔く。パラミデスと云者あり, 諮って犁車の行く手にユリシスが愛兒テレマカスを横た  
へて試るみ, ユリシスが車を行るに忍びざるに及んで説破し, 竟に従軍を背ぜしむ, 云々。是れ豈に  
入鹿に於ける鎌足が苦計の出所にあらずや。彼れにしては子を殺すに忍びずして佯狂を自白し,  
我れにありては子を殺しても國家の爲に盡す。苦計の種子は一ながら, 國民精神と倫理思想の異  
なるとによりて彼此按排を殊にする, 面白からずや。

(三十九年一月)

(坪内雄一, 『文藝瑣談』, 春陽堂, 明治40年5月18日發行 よりコピー, 横書きに變換)